

遂に永の懸案だった常念山脈前衛・有明山深沢右俣遡行が実現、果たして何年思い続けたことだろう。

思い入れが深かっただけに、この沢には同様の思いを持った人物と同行したい思いが強かった。ただ何となく、の人では役不足なのだ。

そんな私の周りに、そんな奇特とも言える人物が二人も居た。

松本に生まれ育ち、現在三十ウン年振りに帰郷して暮らす大学先輩米山氏にとってはただ夏道から往復するだけで満足できる対象にはなかった、と長く登頂を取り置いた有明山だったそうだ。

本年開催の海外遡行同人総会でも話した静岡在住の小林トシゾー氏にとっては山岳会先輩が暮らした穂高町だかの別荘から格好良く眺められるこの山に登るラインとして本沢の選択をし強く希望したのは私同様で意気投合していた。

個人的な話になるが、本年は夏の天候不順を言い訳に自身に自信を持ってない「ノッていない」シーズンで、誘った手前十分意識していたものの身体の準備が追いつかなかったため九月の上旬から断りのメールを入れようと会社デスク前のメモ書きに「トシゾー氏に連絡」と書いて吊っておいたものだった。

九月上旬、近所のガオロ石氏に鈴鹿の山行にお誘い頂いた上に敬老の日には奥美濃はコビクラ谷にも同行し、身体は何とか動くことを確認できたタイミングで米山氏よりヤマレコのメッセージに連絡が入ったのは「呼ばれているのかもしれない」と思うに十分なことだった。また、トシゾー氏(以下、トッさん)との連絡については電話番号もメールアドレスも知らず、共通の知人である成瀬氏に聞けば解るだろう位に構えていたものだからこの期に及んでそれでは遅い。彼のブログにテキストにアクセスしてみたら意外や直ぐに応答があったところにも今山行の感度の良さを思った。

ただ、米氏とはメール上での行き違いがあって、週末二日の都合つかず一度は延期の話も浮上したものの、トッさんの都合と強い意向を汲んで私と二人での実現の運びとなった。あ、風邪引いた。

前夜金曜、今回は松本市内のジャズ喫茶「エオンタ」にも立ち寄ってから米山氏宅にて合流、幻のパーティーで乾杯して就寝するもトッさんは噂通りの飲みっぷりだった。ナルセ譲りだろう。

翌朝米氏に見送られ二台で発ち、有明荘を目指す。何度も眺めた富士型の有明山は格好は相も変わらず良いものの、これから登ろうとする東面がヤケに立って見えた。気圧されているのか？入渓地である観音峠を確認して有明荘に一台を置き、再度峠へ戻って身支度して、祠に参ってから沢への下降を開始した。一〇分とかからず沢床へ。出合はこれが永く焦がれた深沢かよと疑いたくもなる様な貧相さで、確かに兩岸の峙ちには予見させるものがあるとはいえ、その奥に我らを興奮させる何か潜むとは余り想像できない貌をしている。

本流を渡って入渓するや、ん？足跡がある！ こんなマニアックな沢に、それも同日に。トッさんによればつい先週「さがみ山友会」のHPに何とこの沢の記録掲載があったようで、その影響だろう。あれまあとも思ったが、殊さがみ山友会とあれば許しめしよう。前会長の高野氏とは手紙のやり取りもあったし、当会のセンスに人一倍親近感も持っていたので。幾つかの滝を越えてゆくや空間が拡がりを見せてスケールを増し、右に曲がった先に垂れたスラブ状優美滝の取付きに人が居た。沢で人に会うなんて何時以来のことだろう。接近して挨拶を交わそうと見上げるやそれは果たして女性だった。ん？あっ！ペコさん(仮称)だ！ さがみ山友会々報で見知ったあの方だ。もう一方は辛久さん(仮称)というぶなの会パーティーだった。ペコ氏に高野さんのお名前を出すと「もしかして macchan90 さんですか？」とこちらが当てられたのは初めてのことだ。聞けば、今や父と

も呼ぶべき存在の大恩ある高野氏から私の話を聞いてくれていて下さったとのこと。嗚呼。積もる話は後にして、彼らは右へ、我らは左を登ろう。こんな時、トッさんとのライン取りの意見は合う。見た目より難しいF3をワイヤー梯子の世話になって登るセンスも合うなあ。滝右をリードするペコ氏、度胸有るぜ、流石だ。滝上で休んでいるとそのペコ氏から後続三人パーティーが来たことを伝えられた。先んじて登った我々は先行して難なく二俣へ着き、まずはこれから登る右俣の連瀑に驚いておいて、楽しみにしていた左俣大滝を覗きに空身で出掛けた。うむむ、中々の貌をしていらっしやる。トッさんは再訪することだろう。

さあ、いそいそと右俣大滝に取り付く。上段が立って厳しそうだとトッさんはいうが、私はいつもの癖で「近づけば弱点が見えてくるもんよ」と楽観して登りだす。快適な登攀で2ピッチ登るとやはり上段10m滝が好意的なのはサンナビキ谷左俣大滝同様だった。朱色の残置ハーケンが松本CMCの遺物という。沢を詰めるにつれ徐々に正面壁がのしかかる大岩ガレ沢を喘登すると、目標とした屈曲点は近かった。焚火跡があり某さがみ氏はここで泊まった模様で、その先に泊適地は無さそうだし直ぐ先に悪相の滝が見えるという。何とか平地もあったので時間は早いが見晴らしの良いここを幕場とし、ぶなPを迎えた。早々と着火し早々と飲みだした。意外やペコ氏は下戸氏であったが、タバコが似合うぜ。会報で見知った故人を含んだ人物の裏話やらを伺った。後続Pは現れず、四人で朗らかに談笑した。トッさんのザックの半分を占有していた酒が空になる頃には月が冴えて冷えた夜になった。焚火も快調で実に好ましい秋の夜だ。

明けて翌日、朝陽が正面壁を照らす。放射冷却で随分寒い朝となり私は余り眠れなかった。ぶなPは朝食も早く「お先に」と先行された。我々は焚火から離れ難く去り難く、六時半までマッタリした。上方でハーケンが唄う。見上げる悪相の滝が朝日を浴びて浮かんでいた。滝に取り付く二人に追いついた我々はちょっとだけ違ったライン採りで登ってゆくが、楽にない。奥の20m滝が核心で、ぶなPは滝の右手男気チムニー状を攻め始めていた。待つ手もあったがトッさんと私の考えることは同じで、その更に右手の凹状にラインが採れそう。お二人の気が散らない様、右へ。おや、こちらにも残置ハーケンが幾つもあった。残置に頼ることなくトッさんが力強く登っていく。ラストの濡れピッチを私が担当し、辿り着いた終了点の灌木には青いシュリングが残されていて心温かくなった。落石ゴメンネ多摩P。落石ゴメンなトッさん、指切らせて。ロープを解除して笹藪下降するとペコ氏が暖かな陽を浴びて強い緊張から開放されたお顔でジッヘルしており労いの言葉も掛けた。このライン、私には登れなかったろう。

ここ以降先行した我々は、辛ペコぶなPに追いつかれないよう山犬のように山頂へ駆け上がった。餓鬼岳からも遠望できたからここでも見えるだろうと思っていた富士山は、やはりここ有明山からも眺めることが出来て満足した。奥社でトッさんと握手、地図上平らかな山頂部を北へ辿り、そこから夏道は急降下で、辛ペコぶなPに追いつかれないよう又、トッさん相手をいいことに最高記録を叩き出さんと有明荘まで駆け下り、 $y = -14.6x$ の新記録を樹立した。肋骨O.K.?

今回初めて組んだトシゾー氏トッさんは、成瀬氏と”あの”小木森滝を完登しているだけあって悪さを悪さとして感じさせない安定感ある登りで流石と思わせた。次年も何処ぞでまた組もうと握手して有明山神社で手を振った。下山後、松本盆地より見上げた有明山は遡行前と同様に毅然と立ってそこに在った。今後は、夏に冬にこれまでよりは親しみを持って見上げることができそう。

私の興味関心を強く惹く対象に、地図から想像する以上の空間を内包した沢や谷や溪があるが、日光はアカナ沢や南アのミツクチ沢、そしてガンガラシバナやサンナビキ谷左俣と共に、筆頭とは言わないまでもその代表的溪谷には挙げられる。ショボくれた出合からは想像し得なかった立体的廣大空間を、秋空の下大いに満喫した。難しかった悪かった厳しかったという意味に於いてではなく、今年の私のヒット山行はコレだった。

【2017.10.3 記】